

道心

編集 日光山 禅昌寺「道心」編集室
発行 平成15年1月15日
〒732-0002 広島市東区戸坂山根3-2-7
☎ 082-229-0618 zenshoji@bronze.ocn.ne.jp

改歳之令辰

住職 横山 正賢

明けましておめでとう御座います。

昨年の年賀状から在り来たりの年賀の挨拶はやめにして、素朴なただ「祈る」という、私の祈りを皆様に伝えたいという思いを籠めておくことにした。「祈り」には人それぞれの感謝・願いなど思いが籠められる。

しかしこの「祈る」ということに、嘗て貧しき時代に有った素朴な「祈り」とは違うものを感じている。庶民の願いとして、家内安全・健康増進・子孫繁栄などは何時の時代でも変わりはないことであろうが。

「祈り」は自らの信仰が自然に合掌の形となって表れてこそ敬虔な姿となる。

が本堂にお参りしないで帰る人は多い。寺に來れば先ず本堂の正面で本尊様に「お祈り」し終わって、ご先祖様のお墓にお参りし、帰り際にもう一度本堂にお参りして行く人は少ない。ある時、夫を亡くされた方がこの様に話された。

「お寺にお参りしてご本尊様に無事に生かされていることを感謝し、亡夫の墓前で共に暮らせたことへの感謝と近況報告をして、また帰り際にもう一度ご本尊様に、明日の無事をお祈りして帰るのですよ」と言った人があった。この方の祈りに清々しいものを感じた。

仏の慈悲に包まれて生かされている命を感謝し、先に逝かれた夫と共に暮らした日々を感謝し、

お寺によくお参りする代表的な人は、毎朝何処の何方かは知らないけれど本堂にお参りして行く人、朝坐禅に來て、來たとき帰るとき本堂に手を合わせて行く人、寺の近くに住む老婦人は毎日のように夕方本堂にお参りして境内の亡夫の墓前に詣でて帰る。

今も共に生かされているという思いで、残された自分の日々に励みを持ち、未知の明日に祈りをこめて今日の勤めを果たす。
この様な「祈り」ではなからうか。
元禅师著述「正法眼蔵生死」の巻に
心をもてはかることなかれ、
ことばをもていうことなかれ、
ただわが身をも 心おも、
はなちわすれて、
仏のいえになげいれて、
仏のかたよりおこなわれて、
これにしたがいもてゆくとき、
ちからをもいれず、
ころをも、ついやさずして
生死をはなれて仏となる。

(一部現代文変換)

日々の暮らしをあるがままに素直に頂いて、力まず弛まず自分なりに生きること示唆しておられる。

坐禅は調身調息するという。自分の生きる姿勢を、自分なりに比べず力まず肩はらず調え、息は吐く息を大切に、吐く息を意識して時間を掛けて、ゆつくりと静かに吐切ると、次の瞬間吸うという意識をしなくても、ポンと下腹に息が落ち込んでくる。これを四・五回繰り返してみると落ち着く。吸おう吸おうとする息を吸いきることは出来ない。その様に求めても求めても尽きない祈りは空しさを味わう。

有難いと腹の底から吐き出す、無心に祈る祈りは、生かされている計り知れない「智慧」を授かっていることに目覚める。

合掌

春の章 第3話



老化は老花。

美しくなる “3つの教え”があります。

愛知専門尼僧堂堂頭 青山 俊董

私の好きな言葉に、アメリカの詩人ホイットマンの、こんな詩があります。

女あり 二人ゆく

若きは うるわし

老いたるは

なお うるわし

若いだけの美しさや、親からいたってきた美しさには、私は何の魅力も感じません。若さや天性の美しさは、自慢できることではないばかりか、かえって自惚れの材料になりかねません。

『老いたるは なお うるわし』が、とってもいいと思いますか？ 白髪がなくて美しいということじゃないのです。

ごなたの人生にも、必ず山坂がありましよう。その山坂を、悲しみや苦しみ、どう越えてきたか。その生きざまが白髪の本一本に光る、深く刻まれたシワに光る、それが『老いたるは なお うるわし』というのではないでしようか。

その人の人生が幸せであつたか不幸であつたかということは、関係ありません。どんなに恵まれた環境のなかにあつても、不満や愚痴という形の受けとめ方しかできない人は、年を重ねるほどに醜くなつてゆくのでしよう。

折り重なる悲しみや苦しみを、肥料に転じ、栄養として昇華してゆくことのできる人は、年をとるほどに美しくなり、いぶし銀のような、内からにじみ出る人格の輝きを備えてゆくもの。年をとるということは楽しいことであつて、私もそんな年のとり方をしたいものです。

”老化”ではなく”老花”でありたい

老いてなお

艶とよぶべきものありや
花は始めも 終わりもよろし

これは、信州在住の現代女流歌人・斎藤史さんの短歌です。ある時、私の尊敬するお友達がこの短歌をあげて、

「老化ではなく老花でありたい」と、語ってくださいました。

彼女の生きる姿勢の美しい印象が、いまでも忘れられません。

『40歳になったら自分の顔に責任を持て』とおっしゃったのは、確かアメリカ合衆国の第16代大統領のリンカーンでしたね。明日から40歳、さあ急げと言つても間にあいません。今日の私の顔は、今日まで生きてきた私の人生の生きざまの総決算の顔なのです。

20歳の人は20年どう生きてきたかの総決算の顔を、50歳の方は50年の、70歳の方は70年の歳月の生きざまの総決算である顔や姿を、覆うすべもなくさらけ出して歩いてゆかねばならないのです。見る人が見れば、その人の顔や姿や立ち居振る舞いから、ひと目でそれまでのその人の生き方が見通せるというものでしよう。恐ろしいことであり、恥ずかしいことでもあります。

器量の悪かつた若き日の与謝野晶子

実は、このお話は、名前を言えば皆さんご存じの、大きな化粧品会社に頼まれて、その化粧品を扱う小売店の方々に講演させていただいた時の、大要です。

お話を終えて質問の時間になると、数人の方が手をあげました。その最初の質問が、
「先生は顔に、どういふお手入れをしておられま



すか？」という内容でした。驚きであつたと同時に、がっかりもしてしまいました。

2時間もかけて、一生懸命、「お化粧ではない、お手入れではない、衣装や持ち物ではない。洗ったらはげてしまうような、年をとったら色あせてしまうような、そんな金メッキみたいな美しさではなく、生き方による内からにじみ出る美しさこそ、本当の美しい人と言うのです。」と、口を極めてお話ししたのに、この人々はいったい何を聞いてくれたのかしらと、寂しくさえ思いました。

と同時に人というものは、それぞれ生きてきた角度、経験した範囲、持ち合わせた心の受け皿の範囲内でしか受けとめることができないのだなという点にも、気づかせていただきました。

明治の女流歌人・与謝野晶子は、長い黒髪や白いやわ肌など、歌を通して推察する限りにおいては、とても美しい人であつたように思われます。ところが、晩年の晶子と親交のあつたS先生は、

「生まれつきの器量はあまりよくなかった。しかし、晩年の晶子は、惚れ惚れするほど美しかった」と、深い感慨を込めて打ち明けてくださいました。

堺のいとはん（お嬢さま）として育った晶子が、与謝野鉄幹を慕つて家出をし、たくさんの子供を抱え、貧困のどん底にあえぎながら夫の鉄幹を励まし、歌や文学の道を生き抜いた厳しい生きざまが、晩年の晶子を、このうえなく美しく深いものとしたのでありましょう。

泥かぶらが実践した、美人になる老法師の教え

何年前か、真山美保作・演出の『泥かぶら』を観劇しました。

——その昔、顔の大変醜い少女がいました。あまりに醜いので「泥かぶら」とあだ名され、人々の嘲笑の的になり、石を投げられたり、唾を吐きかけられたり…。

少女の心は日一日とずさんでいきます。

わけもなくいじめ続ける口惜しさに荒れ狂い、「きれいになりたい！」と、慟哭している「泥かぶら」に、通りかかった旅の老法師が、美しくなる方法を教えてくれました。

自分の顔を恥じないこと。

どんな時にも、にっこり笑うこと。

人の身になって思うこと。

この3つのことさえ守れば村一番の美人になれる——と言つのです。

少女の心は激しく揺れ動きました。

『美しくなりたい！村一番の美人になれる！』少女の心は燃えあがり、この3つの実践に立ちあがりました。

それなのに、今日も昨日と変わらず、あざけられ石を投げつけられました。しかし、泥かぶらは自分をいじめにかかっている子供たちに向かって、にっこりします。

家族に病人が出て困っている人のところへ飛んで行って、赤ん坊の子守りをしたり、走りづかいをします。人々が喜んでくれる姿を見て、泥かぶらは嬉しくて仕方ありません。

ある日、娘を人買いに売らねばならない近所の父娘を見た泥かぶらは、すすんで身代わりになって人買いについて旅に出ます。明るい笑顔を忘れず、旅の道中もまめまめしくおじさんの役に立とうとする泥かぶらに、人買いは初めは戸惑い、やがてすっかり泥かぶらが可愛くなつてしまい、とうとう人の売買という鬼のような仕事を放棄するまでになるのです。

——これが「泥かぶら」の大まかなストーリーです。

昔からの諺に「目は口ほどに物を言い」とか「顔は心の鏡」などと言います。

どんな顔の造作がよくても、目が濁っていたり死んでいたら美しくありません。顔に暗い影やトゲトゲしたものがあつたら、やはり美しくありません。

心がいきいきと明るく輝いて初めて、目も顔も美しいものとなるのです。

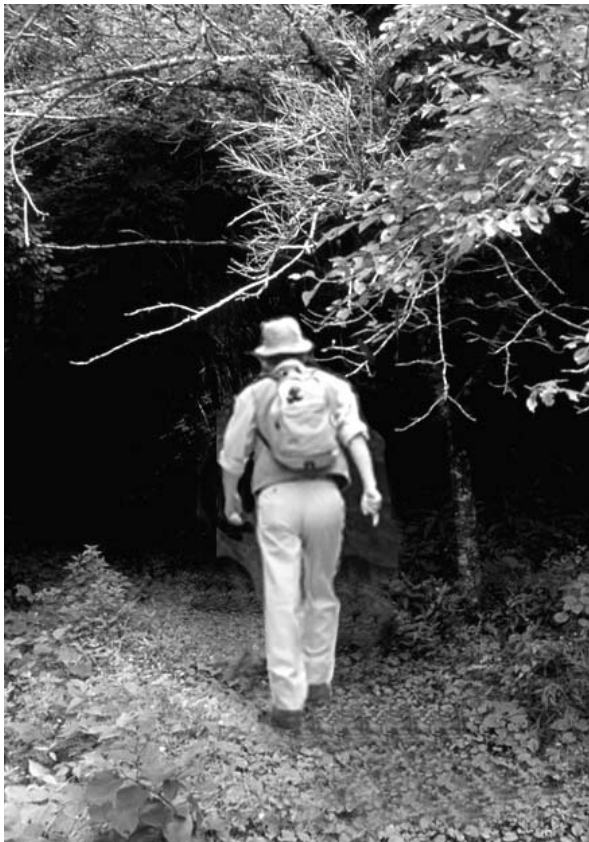
老法師が泥かぶらに教えた「美人になる3つの方法」。“私たちもこれを心の片隅にメモしておいて、毎日の生活の中で実践して、より美しい人になりたい、と思つことです。

※（本文は、青山俊童尼老師著

「悲しみはあした花咲く」光文社より
抜粋したものです。）

竹原の街で出会った 懐かしい思い出

東区在住 清谷 克寛



昨年初めて方丈さんに誘われて山登りを始めて、十ヶ月が過ぎた。これがきっかけで、近郊の山はもちろん、何とか交通機関が確保されていて日帰りで登れる山のほとんどに登り尽くした。もう残っているのは、竹原の朝日山、倉橋島の火山と福山の沼南アルプス（彦山、葛城山、熊方峰）くらいとなった。いずれも沿岸部に位置することから、夏

の暑い時期はしんどそうなのと、藪こぎを強いられることを考えると、ついつい躊躇し、ここまで来てしまった。中でも以前住んで居たことのある、竹原の朝日山が残っているのは気がかりで、十一月も終わりに近づいたばかりが陽気の日に登ることにした。

「取りつきが分かりにくく、登山道もほとんど整備されておらず、宿根方面への下山道

にいたっては、踏み跡も消えてしまっている」とある人のホームページに記載がある一方で、清酒「幻」で有名な中尾醸造の「幻香たより」（第八号）にはその欄外に、「標高四百五十四メートル、展望台がある頂上からは市街地をはじめ瀬戸内の島々がまるで絵のように見渡せます」と絶賛してあったり、訳の分からない山である。果たしてどっちが正しいのか？ 万が一道に迷っても竹原なら土地勘もあるし、思い切って登って確かめることにした。

実際に登ってみると、登山道は整備されていないのを通り越して、うち捨てられた感じする酷いものであったが、それとは対照的に頂上まで車道が整備されて車で気軽に登れ、頂上広場の展望台からはまさに360度の眺望が得られる絶好の観光スポットとなっており、二つの相反する記載は全く矛盾するものではなかった。まさに「人には添う

て見よ、山には登って見よ？」であった。それにしても、登山道の荒れ具合は尋常ではなかった。この地域故にある程度の藪こぎは覚悟して行ったが、藪こぎならぬ笹のトンネルには驚いてしまった。かつて八本松の曾場ガ城山の頂上付近で矢竹のトンネルは経験したことがあるが、笹のトンネルは初めての経験。何度も何度も腰をかがめて這うようにしてぐぐり抜けた。

このように山自体は全期期待はずれで面白くなかったが、その帰路、竹原駅に行く途中、以前下宿していた森川邸の前を通りかかると、今年の三月二十五日までの予定で、保存に向けての工事中であった。

森川邸と言えば、明治初期から昭和初期にかけて製塩業で財をなした先代が贅を尽くして建てた大邸宅で、現在は国の文化財建造物に指定されている。かつて私は昭和四十七年の一年間、竹原保健所に勤務していた時に、この森川邸の玄関横の一間に下宿させてもらっていたことがある。数年前まで大奥さんが守ってこられたのであるが、大奥さんが亡くなられた後は、市に寄贈されて保存されることが決まっていたようである。竹原に行く度毎に立ち寄り、門

の外から中の様子を窺うが、最近とみに建物の傷みが目立つようになり、心配していた。

工事中ということで、表門も開いていたので、立入禁止は承知の上で、久し振りに中に入らせていただいた。ほとんどの調度品は一時搬出されていて、ガラーンとしていたが、私が住んでいた部屋や隣の大広間、庭の茶室などとても懐かしく、しばし時の経つのを忘れて昔の思い出に浸ることができ、とても安らいだ気持ちになった。

大学で研究を生業とし、日頃から古い概念を次々に突き崩しては、そこに新しい事実を積み重ねてゆく作業に日夜しのぎを削っている私が言うのも矛盾しているようだが、昔の職人が技術の粋を集めて築きあげた物には見る者を包み込む、えも言われぬ暖か味があり、心から癒される感じがたまらない。

市の観光協会としても現時点では最終決定はしていないようだが、一般公開に向けて検討中とのこと。街並み保存地区から少し離れていることが問題かもしれないが、私にとってはかけがえのない青春時代の大切な思い出もあり、ぜひ公開して欲しいものである。

親の後ろ姿で 子は育つ！

山 主



十九日の法要の日が最初で、以後毎月の命日やお彼岸・お盆参りと、幼児期・少年期・青年期・成人された今日まで、私や弟子の訪問の際に在宅していれば必ず仏壇の前で一緒にお参りしています。

そのお兄さんは最初に出会った時から現在まで、最初に受けた「落ち着いた利発な少年」の印象は変わらぬ風貌です。

彼はその後地元の小・中学校から公立高校へと進み、ご本人の希望通り大学は教育学部へ進まれ、現在公立中学校の数学科教員として奉職されています。

このお兄さんの場合傍目からの見方ではありますが、親御さんにとつて手の掛からない、素直で順調にご自身の目指す道を歩んで来られたように推測しております。

一方弟さんの方も私の訪問の際には、一緒に仏前にお参りしていました。幼年期から少年期に掛けて、はにかんだり、時に悪戯っぽく私に接しておりました。時には母親の「方丈さんが来られたよ」の声にも我関せず遊びに夢中になっていた時期もありました。

彼は高校入試・大学入試の折り第一志望校に進めず所謂

挫折を経験しました。この頃の毎月月参りの日が休日であるときは、よく悩みを打ち明けてくれました。ある時大進学の時であったか、就職時だったか重い悩みを抱えていたとき、私とのやり取りの中で、

「君は将来の職業は何をしようと思っているのか」と尋ねると

「高等学校の教師になりたいんだけど・・・」と自信なげに答えた。

「君のように進学の時も、就職についても、挫折を経験していることは、高校の教師になったとき、生徒の悩みが理解できる、貴重な体験として生かされてくる」等と話したことを憶えています。

今彼は広島市内の伝統有る高校の教師として、生徒達から怖い先生であると同時に、生徒の良き理解者として慕われる教師として輝いた生き方をしていきます。

このお二人の育った家庭環境はと申しますと、サラリーマンの父、ピアノレッスン教師の母、母方の祖母という三世同居の家庭で、父上は誠実ということに置いて大変優しいお人柄ながら、とても優しいお方で、職場では同僚の面倒見の良い人として、地域

社会では町内会長など地域への奉仕者として多くの方々から慕われたお方でした。お母様も人に接して謙虚で何方に対しても優しく接しられるお方で、一家は音楽一家といわれ、二人の兄弟はどちらも学校の課外活動ではブラスバンド・マーチングクラブの指導者として奉仕をされていて、生徒や父兄から敬愛される人として、私から見れば荒んだ時代とはいえ、彼らのいる処は輝いているように見えます。

敬虔な仏教徒として仏に皈依し祖先を敬い他に対して常に誠実な、ご両親の生きる後ろ姿そのままに、生きていく二人の兄弟の生きる姿は、故東井義雄先生の子育てに就いて、「根を養えば樹は自ら育つ」の教訓をそのまま見るようです。

この文を綴っている途中でご兄弟の年齢を確認のため電話をしたところ、弟さんが出て「実は先ほど祖母が息を引き取ったところですよ」とのこと、因縁の不思議を感じると共に、七十七歳の腰の曲がった兄弟の母上が、ご自分の母親を自宅で享年九十九才まで、孫や曾孫と共に看取られた。

自分の親の死の際まで、親の後ろ姿で子や孫に示す生き様は素晴らしい。

◆道心・趣味の会◆

短歌

● 日高より今日届き来る帯昆布

大和の国の海の宝よ

● にぎやかに「かごめ・かごめ」を
うたう子に
会えば昭和へわれかえるなり

東区 矢野淑子

俳句

● あな嬉し 夢もつ都々毛 茜色

安佐南区 夢

● 天鷲^{びろんど}の 苔^{こけ}の褥^{しとね}に 紅葉^{もみぢ}散る

● 古い易く 古い歳^{とし}晩^{ばん}の 米^{こめ}をとぐ

東区 河野 貞女

● 指先に名月^{のうた}迎え 野点^{のうた}かな

● 返り花 賽^{さい}もさんずも 越^こえたやら

東区 岡村 竹畔

● 改^{しゆしやうえ}歳の 幸^{しゆき}を呼び込む 大般若

● 修正^{しゆしやうえ}会 祈^{いのり}りをこめる 親子づれ

禅峰

◆行事報告◆(十月～一月)

● 十月十九日に行われた月見演奏会
「Tsukimi in 寺」では、
フルート大代啓二先生・ハープ井上

久美子先生が熱演。フルートとハー
プの美しい音色が三百五十余名の聴
衆を魅了しました。



10月19日月見演奏会

◆行事案内◆(二月～四月)

●毎週定例行事

◆坐禅会

● 暁天坐禅会 月曜日～金曜日
毎朝六時より四十分まで
(四月からは毎朝五時十分より)

● 十二月十五日に行われた年末大掃
除では、寒空の下、大勢の家族づ
れでのご奉仕に感謝申し上げます。
平成十五年元旦の年頭祈願法要
(修正会) が午前十時から行われ、
青天に恵まれ家族お揃いでの参拝
者で賑わった。今年一年の無事を
祈願致しました。

◆御詠歌の会

第二金曜日午前十時より自主練習
第四金曜日午前九時より講師を招
いて練習 昼まで

◆日曜坐禅会

第一日曜日 午前九時より坐禅・



茶道稽古の集い

● 水曜坐禅会 午後七時より坐禅・
茶話会 終了八時半
● 婦人坐禅会 毎週金曜日午後一時よ
り坐禅・茶話会 終了三時
(第一金曜日のみ坐禅の後、写経、
茶話会)
● 毎月定例行事
◆ 上田宗箇流茶道稽古日
毎月一回 今年から第三金曜日を
予定 午後二時から
※お抹茶と和菓子を気軽に楽しむつ
もりでご参加ください。

● 茶話会 終了十時半
● 毎年定例行事

● 春彼岸法要及び護持会総会

三月十五日(土) 午前十時より

※今年は先住当山廿二世大法正身大
和尚の五十回忌法要の為例年より
三十分早い開催となりました。彼岸
法要の後先住忌法要(三十分)を
厳修いたします。

●恒例行事

● 登山の会 二月二十二日(土)
行き先 極楽寺山(廿日市市)
午前九時半 JR廿日市駅集合
(申込みは電話にて)

● 青山俊董尼老師講演会

二月二十八日(金)

講座は午前十時半～十二時・

昼食・午後一時半～三時まで(坐
禅は九時より)

会費二千円(午前のみ、午後のみ
の方は千円) 昼食代一人・百円

※昼食は持参されても結構です。

(お茶はこちらで用意いたします。)

◎昼食が必要な方は必ずお電話にて
申込み下さい。

原稿募集

皆様の随筆、旅行記、体験談、趣
味の短歌俳句など何でも結構で
す。お寄せ下さい。次号原稿締切
は三月末日までにお願いします。